

伊豆の湯ヶ島はやく隊

往年の名作「伊豆の踊子」を美空、石濱の思春期コンビで

「伊豆の踊子」湯ヶ島ロケ記

●近代映画54年5月号より



川端康成氏が一高在学時代に書いたといわれる有名な「伊豆の踊子」が、松竹大船で美空ひばりちゃん、石濱朗さんの魅力的な顔合せで再映画化されることになった。

原作は、もとより題名の示す通り伊豆の踊り子の風物詩を通して、若き日の清らかな愛情を描いたもので、映画の撮影も伊豆ロケーションからスタートを切ることになったのである。

記者達がロケ現場である伊豆湯ヶ島温泉のとある橋の袂にたどりついた時には、ちょうどひばりちゃんは出番が終わって、先にロケ宿に引き上げ、石濱朗さんと片山明彦さんの二人が話しながら歩いて来るシーンを撮っていた。

「私、知りません」
『はい、その件なんですよ』
『ほう?』

ののままの芝居ということ、一つ例をとって見ると、昨日記者達が着く前に行われた撮影の時の話なのですが、

れる湯本館という宿だった。吉奈温泉に着いたロケ隊は、夜のシーンを撮るのでまだ夕景には間があったので、しばし暗くなり待ちということになった。

『でも、親爺が死んじゃって、今はもう人手に渡っちゃってますが……』

旅館の二階で、美空ひばりちゃんの踊子、薫が、旅館の下を通りかかった石濱朗さんの水原を見つけてオヤと下を覗くシーンを撮った時のことだが、本当は二階でひばりちゃんだけを撮ればいい所を、監督の野村さんは、石濱朗さんに本当に下を通らせて、

まず始めに、栄吉達旅芸人一座片山明彦さんの栄吉と、その女房千代(宝塚から松竹へ入社第一回作品の由美あづささん) 妹の薫(美空ひばりさん)、雇い女の百合子(SKDの雪代敬子さん) 夜更けの町を軒並みに流して歩くシーンである。

と片山さん、歩きながらポツリポツリと身の上話をして聞かせる。往年の名子役片山明彦さんと「少年期」の子役スターでデビューした石濱朗さんとお二人とも、子役スター出身者で初顔合せなのだが、呼吸の合った演技を見せる。

とたのんだのだそうだが、そして実際に、石濱さんがひばりちゃんに舌を出して見せて、それをひばりちゃんが、オヤ何んだらうと、覗いたところを撮影してしまっただという。

めつきり美しく成長した美空ひばりちゃんが、可愛らしい桃割れ髪に花かんざしを差し、質素な振袖に帯を胸高に締め、太鼓を大事そうに抱えている。

監督の野村さん始め、石濱朗さん、美空ひばりちゃん、片山明彦さん、由美あづささんと出演者も若い人達ばかりで、この「伊豆の踊子」を、以前大日方伝さんと田中絹代さんの共演で好評を博した前作に負けない、いやより以上のものにしようと意気込んでいる。

さて、橋のたもとの撮影は、石濱朗さんのアップを撮って全部を撮り終え、一同宿へ帰って一休みした後、吉奈温泉へ向かった。まるで伊豆の温泉めぐりである。スタッフの人達の泊まっている宿は、川端康成氏がこの「伊豆の踊子」を書いたといわ

由美あづささんと、雪代敬子さんは三味線を手にし、片山明彦さんは小道具を包んであるらしい風呂敷包みを持っている。

白線帽に高下駄をはいた当時の一高生姿の石濱朗さんと着流しに半てんを引っかけたいなせな流し芸人姿の片山明彦さん、これがお二人のいでたちである。

伊豆の修善寺に先輩を尋ねて遊びに来た一高生水原(石濱朗さん)が、たまたま知り合った旅芸人栄吉(片山明彦さん)の妹の踊子、薫(美空ひばりさん)に心をひかれ、別れるに忍びず、そのまま旅芸人一座の後を追って伊豆を旅して廻るのだが、このシーンはその旅の道すがら、片山明彦さんの栄吉がこうして旅芸人として廻って歩かねばならなかった身の上話を石濱朗さんの水原にして聞かせるところなのである。

監督は新鋭の野村芳太郎さんで眼鏡の奥の柔和な眼で、じつとお二人の演技を見守っている。

『私も今は、まあ、こんなしがたない暮しをしています……これでも高等学校から大学へ行きたいと思ってた事があるんですよ』

『そうですか……東京にいたんですか?』

『いえ……この先の湯ヶ野の生れな入って行くと、後から皆それに従い、賑やかにお囃子を始め出した。』

ひばりちゃんが太鼓を叩き、由美さんと雪代さんが三味線をひき始める。

宿の番頭が投げ出すように与える小銭を、器用に扇子で受けた片山さんが、

『有難う御座います、またお願いします』

と行って皆をうながして去って行く——ここのシーンは、

くる日もくる日も、温泉町を流して歩く旅芸人のわびしさを描くにふさわしい、情緒豊かな吉奈温泉の夜景であった。

入浴シーンでのぼせる

石濱朗さん

次は、旅館の風呂場を借りての石濱朗さんの入浴シーンである。

真裸になった石濱朗さんが、お風呂につかりづめの撮影で、

『うわあ!のぼせて来ちゃった』

と悲鳴を上げていた。それから丹前姿に着かえた石濱朗さんが、初め

野村監督の演技指導の方針として、演技しない演技というものを俳優さん達に望んでいる。これは自然

温泉水めぐりである。スタッフの人達の泊まっている宿は、川端康成氏がこの「伊豆の踊子」を書いたといわ

一軒の旅館の前にさしかかると、と片山明彦さんが声をかけ先に

『えー、今晚は』

39